

『徒然草』研究—第九三段について—

● 土 屋 博 映

一 要旨

本稿は、『徒然草』（以下「本書」と呼ぶ）第九三段（以下「本段」と呼ぶ）について論ずるものである。本段は、現代人の常識的感覚とし、論理的に矛盾と思われる部分を含んでいる。それが、本当に矛盾なのか、そうでないのか、をまず検討した。作者の「兼好法師」（以下「作者」と呼ぶ）にとっては、矛盾だという意識はなく記述していると判断し、彼の本当に伝えたいことは何かを結論付けた。

二 本文

①「牛を売る者あり。買ふ人、明日その値をやりて、牛を取らんといふ。夜の間、牛死ぬ。買はんとする人に利あり、売らんとする人に損あり」と語る人あり。

②これを聞いて、かたへなる者の言はく、「牛の主、まことに損ありといへども、又大きな利あり。その故は生あるもの、死の近き事を知らざる事、牛、既にしかなり。人、又おなじ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存ぜり。一日の命、万金よりも重し。牛の値、鵝毛よりも軽し。万金を得て一銭を失はん人、損ありといふべからず」と言ふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」と言ふ。

③又言はく、「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや。愚かなる人、この樂しびを忘れて、いたづがはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危ふく他の財をむさぼるには、志、満つ事なし。生ける間生を樂しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。もし又、生死の相にあづからずといはば、実の理を得たりといふべし」と言ふに、人いよいよ嘲ける。

（※本文は、『日本古典文学全集』（以下「全集」と呼ぶ）による。段落の冒頭の数字は筆者による。）

三 全集の注

本段への見方として、一般の代表として、まずは全集の頭注を見ていく。

まずは全体のまとめである。最終的に、この部分についての見解を述べることにする。

明日売る牛を死なせた持主が損をしたとする日常の論理は、死に当面している生命を忘れているところに成り立つ。忘れていものには、生を樂しむことも切實でない。相對世界を超越することなど通じようもない。嘲る人々の論理には、少しの發展もないが、「かたへの人」の論理にも、世俗とかみあわない空転がある。兼好は「かたへの人」の立場から、度しがたい世俗の論理を批判しているが、彼らの嘲笑する声にも、耳をかしているに相違ない。

冒頭で「明日売る牛を死なせた持主が損をしたとする日常の論理」とあるが、そうとらえるのが、いわゆる日常の論理として、妥当であろう。それは当然「死に直面している生命を忘れているところに成り立つ」わけである。「忘れているもの」は「生を楽しむことも切実で」なく、「相対世界を超越する」（つまり、真実の世界に迫る）ことなど「通じようもない」わけである。次の「嘲る人々の論理には、少しの発展もない」とはどういうことであろうか。おそらく「相対世界を超越」できない、つまり、表面的に見ることから、内面の真実に迫る姿勢がない、ということであろう。そして『『かたへの人』の論理』にも、「世俗とかみあわない空転がある」と、「空転」と否定的表現を用いているのは、おそらく、説得力に欠ける、と言いたいのであろう。ここで最後の部分「兼好は『かたへの人』の立場から、度しがたい世俗の論理を批判しているが、彼らの嘲笑する声にも、耳をかしているに相違ない」に注目する。作者の傾きは、『『かたへのひと』の立場』に立ち、「度しがたい世俗の論理を批判」する方向であろう。そしてまとめの最後に注目してみたい。「彼らの嘲笑する声にも、耳をかしている」という表現は見逃せない。この「まとめ」（全集の頭注）によれば、作者は「かたへの人」と「世俗の論理」の双方を認めていることになる。はたしてそういうとらえ方でいいのかどうか、というのが大きな問題の一つになる。

四 各段落の内容

①「牛を売る者あり。買ふ人、明日その値をやりて、牛を取らんといふ。夜の間に、牛死ぬ。買はんとする人に利あり、売らんとする人に損あり」と語る人あり。（本文）

発端の、第一段落である。「語る人」の内容は、牛の売買に関し、売る前に牛が死んだので、「買はんとする人」に「利」があって、「売らんとする人」に「損」があるという。これはまことに常識的な判断である。「語る人」は、本段において話題を提供する役割をしていることになる。

②これを聞いて、かたへなる者の言はく、「牛の主、まことに損ありといへども、又大きな利あり。その故は生あるもの、死の近き事を知らざる事、牛、既にしかなり。人、又おなじ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存ぜり。一日の命、万金よりも重し。牛の値、鵝毛よりも軽し。万金を得て一銭を失はん人、損ありといふべからず」と言ふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」と言ふ。（本文）

①を受ける第二段落は「かたへなる者」（全集では「かたへの人」として注を加えている）の反論から始まる。「牛の主」つまり「売らんとする人」に「損」はあるが、「大きな利」もあるというのである。「その故は」以下の理由にあたる部分が、問題となる。その理由が「皆人」、つまり「その場にいる人」には受け入れられなかった。それも「嘲り」であるから、受け入れられるかけらもないということになる。「かたへなる者」の論と、「その理は牛の主に限るべからず」という「皆人」の反論に注目したい。

③又言はく、「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々楽しまざらんや。愚かなる人、この楽しみを忘れて、いたづがはしく外の楽しみを求め、この財を忘れて、危ふく他の財をむさぼるには、志、満つ事なし。生ける間生を楽しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を楽しまざるは、死を恐れざる故なり。もし又、生死の相にあづからずといはば、実の理を得たりといふべし」と言ふに、人いよいよ嘲ける。（本文）

第三段落は、「かたへなる人」の、「皆人」への反論、というより、「皆人」を納得させようという、解説（説明）といってもいい。「されば」は何を受けているのかが、まず問題。そして、それに続き、「人、死を憎まば、生を愛すべし」という本段の主題（キーセンテンス）ともいうべきものが記される。果たしてこれが主題か否かが、次の問題。「存命の喜び、日々を楽しまざらんや。」は「生を愛すべし」を受けている。「この楽しみ」はもちろん「存命の喜び」であり、後続く「外の楽しみ」と対照をなしている。次の「この財」は「この楽しみ」であり、「他の財」は「外の楽しみ」である。「この理」は②の「その理」と同一なのかどうか、次の問題。次に、「人皆生を楽しまざるは、死を恐れざる故なり」とか言っておきながら、「死を恐れざるにはあらず、」と即座に否定し、「死の近き事を忘るるなり。」と②の「死の近き事を知らざる」に戻しているが、これは作者のどのような意図かが、さらに問題。次の問題は、「もし又、生死の相にあづからずといはば、」という仮定であるが、一応②の「その理は牛の主に限るべからず」と言う「皆人」への提言ではないか、としておこう。そう言うことであるならば、「実の理を得」たと言える、という趣旨であろうが、その「かたへなる者」の主張は、さらなる「皆人」の「嘲り」によって、否定されるというものである。最後の問題は、「皆人」の「嘲りの本質である。その前にでてきた「嘲り」との相違である。以上が③の問題点であるが、本段の問題は③に集中している、第三段落の責任が大きいということは確実である。

以上の内容につき、より詳しく論じて行きたい。まずは諸注をとりあげる。

四 諸注について（※は本稿筆者の考えである）

「牛死ぬ」

この段、間を仮設して、兼好が答えたと見るべきである（大全）

※本書では①の「 」の中の「夜の中に、牛死ぬ。」を地の文としている。これは相当大きな問題である。

「この理あるべからず」

ここは並立文の集約であるから、その意で解しなければならぬ。まず「死」を憎むならば生を愛しなければならぬとし、「存命」の喜びを「この楽しみ」と受け、「この財」とし、「生を楽しむべし」と肯定している。「存命のよろこび、日々を楽しまざらむや」が中枢になっているのである。「牛の主に大利ありといふ理」と解する文段抄の説はおだやかでない（永井）。「この理」は、生を愛する理の意である（永井、佐成）。死に臨みて死を恐れたならば、矛盾極まることであると解する（橘、塚本、西尾）こともできる。「この」は、上文をうけていると見るべきである（和田、松尾）。

※「牛の主に大利ありといふ理」等、この「理」が何を指すかが問題である。

「人いよいよ嘲る」

きいている人たちが、きけばきくほど真意がわからなくて、この男を嘲笑したというのである（沼波、佐野、佐成）。ところが、内海説に、「きいている人たちが自分で自分をあざけたのである」と強く主張され、橘（宗）改稿説に、（中略）「愚人、道を知らずして笑ふ」とするのが、妥当ではあるまいか。

※内海説が果たして言えるかどうか問題である。

〔補説〕沼波説に「ここに生を楽しむとっているのは、頗る珍とするに足る」とし、「要は、無常を知りぬいた上での生の楽しみである。理智積み上げの哲学、科学を送迎した上での耽美である。」とある。山口（剛）説に「死を忘れて生を楽しむのでもなく死を自覚して生を楽しむベイタアの如き享楽主義者でもなく、生死の相を達観する悟道の人、荘子の真人の如き心境を憧憬している。」と断じ、富倉説にもまた、「無常の認識に立脚した悟道的享楽主義」と見てある。三者の説に撞着があるわけではなく、「人死を憎まば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々を楽しまざらむや」という千古の格言（佐成）の中に、死を越えて、生を味倒しようとする、兼好の独自の生命観が見られると思われる。（四七、青露）

※「死を憎まば、生を愛すべし。」がテーマかどうかの確認が必要である。

（注）以上の引用は『徒然草諸注集成』（田辺爵 右文書院）による。

「嘲りて」

思うに、この嘲った当人（たち）は、真意がわからなかったり、理解が及ばなかったりではなくて、本当は「かたへなる者」以上に、事の本質をもう一步先まで見越していたのではなかったろうか。

※「ことの本質をもう一步先まで見越していた」というのは大胆な見解である。認めがたいが、論証の参考にはしたい。

「いよいよ嘲る」

ここでも「かたへなる者」の発言のタイプに必ず付随する理、とくに最上級の生き方がもつという「実の理」に対しての嘲笑であった。要するに、理と実践との間隙、その微妙さ困難さのほどを直感して、笑わざるを得なかったのである。したがって、筆者兼好は、理はもちろん大事中の大事なのだが、より実践の場に立つ「皆人」・「人」の切なる心情からほとぼり出た嘲笑の声にも、さらに大きな関心に支えられた目を配っていたと思う。

※『「皆人」・「人」の切なる～目を配っていたと思う』も大胆な意見である。同様に認めがたいが、論証の参考にすることにする。

（注9）以上の引用は、『徒然草講座 第二巻 有精堂 山下宏』による。

「本段全体」

1. 世俗の論理では通用しない「かたへなる者」の嘲笑された考え方が、実は兼好の主張したい見解を代弁しているという屈折した手法になる挿話形式である。兼好自身の言葉は何も書かれてはいないが、ここでは、無常の認識が重大なことであると語りかけながら、兼好は一つの悟道観を説示していると言ってよい。

2. この章段の主題となる章句は、「かたへなる者」が語った「人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々を楽しまざらんや」がそのキーセンテンスとなるのだろう。

3. もとよりこの挿話は、無常の認識に関する両極で対立する見解のぶつかりあいで展開させたものである。無常を生をなかで根元的に意識していくことによって、「存命の喜び」を発見していくことを、兼好はまず、第一義的に要請しているのである。現世における生の充実のために、人間は、無常の理を認識することの不可避さを、兼好はここでも強調しているのである。

※1は「かたへなる者」の嘲笑された考え方が、実は兼好の主張したい見解を代弁しているという屈折した手法」というところがポイント。2は「人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、

日々を楽しまざらんや」がそのキーセンテンス（主題）、というところがポイント。3は「無常を生のなかで根元的に意識していく（中略）第一義的に要請している」というところがポイント。

（注）以上の引用は『徒然草 研究と講説』（桜楓社 佐々木清）による。1～3は筆者の付け加えた番号。

「その理」

「かたへなる者」の言ったことばの全体を指す（中略）理屈は、牛の持主だけに限ることはできない。あらゆる生きている人一般も、一様に、大なる理があることになるというのである。

※「ことばの全体を指す」ことがポイント。

「されば」

前の「一日の命、万金より重し。（中略）損ありといふべからず」を受けていて（後略）

※「されば」の指示している部分はそのとおりである。

「愚かなる人」

「愚か」の意味を考えると、当然自覚すべき人生の原理に目ざめぬことにあるようである。ここでもそれと同じ考え方に立って、批判の対象となしている。

※「おろか」の意味については大体そのとおりである。ただし、「人生の原理」というより「無常（死）」の意識であろう。

「本段全体」

「かたへなる者」の論説が、それ自体いかに深刻な人生問題を論じていても、結局は、一般人の理解を越えているばかりか、かえって、その嘲笑をも招くものであることをかかる形式によって示そうとしたところにあるように思われる。

※「一般人の理解を越えている」というのはごく常識的な考えである。

「かく解すると、第一の生命価値論も、第二の生命愛情論も、その底に存する「死の自覚」を欠く世人一般には通用しないということを兼好ははっきりと見通して、この段を書いたということが出来る。

※「世人一般には通用しない（中略）見通して」が、ここでのポイントである。

（注）以上の引用は、『徒然草全注釈 上巻』（角川書店 安良岡康作）による。

五 本段の検証

四までの、考察をもとに、本段の検証をしていく。問題点を列挙すれば以下のとおりになる。

- 1、「夜の中に、牛死ぬ」が、『諸注集成』ではこの部分を地の文としてとらえている。
- 2、「皆人嘲りて」「人いよいよ嘲る」の「嘲り」「嘲る」の意味するところは何か。
- 3、「その理」とは何を指すか。後の「この理」と「実の理」との関連はどうか。
- 4、「されば」は何を指すか。
- 5、「人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々を楽しまざらんや。」は本段のキーセンテンスか。
- 6、「愚かなる人」とはどのような人か。

以上の問題点について、ひとつずつ検証していく。

1については、『諸注集成』の本文では、次のようになる。

牛を売るものあり。買ふ人、「あすその価をやりて牛をとらむ」といふ。夜の間に、牛死ぬ。「買はむとする人に利あり。売らむとする人に損あり」と語る人あり。

※多くの注釈書は「と語る人あり」の「と」は「牛を売るものあり」からを受けるとしている。ここで、「語る」という言葉に注目したい。ここでは「牛を売るものあり」と第一の登場人物が描かれ、次に、それを受けて「買ふ人」が登場し、「あすその価をやりて牛をとらむ」と「いふ」のである。「その価」とあるように、売り手と買い手が登場し、やりとりをしていることが明らかである。もしも、次の「夜の間に、牛死ぬ」を地の文としてとらえると、最後の「買はむと～」の会話も「語る人」が売り手と買い手と対等に登場人物として存在していると考えないとおかしくはないか。ならば、「語る人」ではなく、「人～と語る」とでもしなくてはならないはずであり、買い手が「いふ」なのに。登場人物としての「人」が「語る」という重い言葉を使うだろうか。本書中に「いふ」はごく当然の日常語として多く使われているが、「かたる」の用例は「いふ」に比し、はるかに少ない。本段に話題を提供する姿勢で「人」は語ったのであり、「牛を売る」からすべてまとめて「と語る」で受けているとみるほうが正当な取り扱いと考えられる。つまり、「語る人」はその場にいた「皆人」に格好の話題を提供したということになる。そう考えるのが自然である。

2について、「嘲る」という言葉は、二度出現している。

※日本語の常識としては、相手を否定する、非難する気持ちが強い意味を表す。第二段落の最後で「皆人嘲りて、『その理は牛の主に限るべからず』と言ふ」とあり、さらに第三段落の最後では「人いよいよ嘲る」とあり、本段は、まさにこの「嘲る」という言葉でまとめられているのである。「嘲る」という言葉はそんなに出てくるわけではない。この言葉は本段で重要な役割を担っていると考えられる。「結論」でまとめたい。

3の「その理」の「その」は何を指示しているか。また後の「この理」と「実の理」との関連はどうか。

※「その理は牛の主に限るべからず」と「皆人」が「かたへなる者」の発言に「嘲り」て言っているのであるから、「その」が「かたへなる者」の会話の中にあるのは確かである。『全注釈』には、『その理』とは、「かたへなる者」の言ったことばの全体を指すのであるが、中でも、終りの『万金を得て一銭を失はん人、損ありといふべからず』と断定した個所を受けていると思われる。」とある。「ことばの全体を指す」というならば、この会話の全体で主張したいことは何かと言えば、会話冒頭は「牛の主、誠に損ありといへども、又大きなる利あり」であり、最後が「万金を得て一銭を失はん人、損ありといふべからず」というのだから、冒頭と末尾が照応しているのわけで、当然「万金を～」を指すということになる。全注釈の説明はそのとおりである。ただ問題は「牛の主に限るべからず」という真意が問題となる。その前に「嘲り」とあるので、それとの関係を「結論」でまとめたい。また第三段落の「この理」とは前後関係から「存命の喜び、日々を楽しまざらんや」を指すように見える。またその後の「実の理」の「理」は「真理」の意味のように見える。つまり、本段に見える「理」は同じ語でありながら、指示するものが異なっているようである。これも「結論」でまとめる。

4の「されば」は、何を指すか。

※全注釈には、『「されば」とあるのは、前の『一日の命、万金より重し。(中略) 損ありといふべからず』を受けていて、そうであるから、と言ったのである。』と記されている。しかし、この見解は少々おかしく思われる。本段は、「語る人」の話題提供を受けて、「かたへなる者」が自己の考えを披歴した。それに対して、皆人が嘲って「その理は牛の主に限るべからず」と言った。それを受けて、再び「かたへなる者」が「されば」と言ったのだから、素直に考えれば「その理は牛の主に限るべからず」をさしていることになる。この「されば」も「結論」でまとめることにする。

5の「人、死を憎まば」以下は本段のキーセンテンスたり得るか。

※『研究と講説』では、これを、キーセンテンスと断定している。「人、死を憎まば、生を愛すべし」のみならずそれは言えようが、「存命の喜び」以下は必要であろうか。本段は論理の展開が速い。第三段落は、「皆人」の「嘲り」に対抗しようとしたのか、次から次へと論が展開していくので、キーセンテンスかと断定するのが容易ではないというのが本当のところであり、これも「結論」でまとめることにする。

6の「愚かなる人」はどういう人か。

※『全注釈』には、『「愚か」の意味を考えると、当然自覚すべき人生の原理に目ざめぬことにあるようである。』とあるが、まあそうである。ただ「人生の原理」という抽象的なとらえ方よりは「無常(死)」について無関心な者ととらえるほうが実情にあっている。筆者の研究では、「おろか」という言葉は本書の前半では、「無常に無関心な者」に用いられ、後半では、単に「馬鹿」に近く用いられているという結論である。

六 結論

本段については、様々な疑問点が浮かんだ。検証でも確定できない部分が多かった。形の上で明らかなのは、三段落という構成になっていること。第一段落では、「語る人」が、牛の死に対し、買わなかった人は得をし、売ろうとした人は損をした、と至極まっとうな見解をのべた(提示した)こと。それに対し、第二段落では「かたへなる者」が「牛の主、誠に損ありといへども、又大きな利あり」と、「死」を前面に取り出し、売り手が損をしたわけではない、と逆説的な論を展開したことにより、「皆人」が嘲ったこと。第三段落は、その嘲りに対する、「かたへなる者」の反論であり、次から次へと、反論が続いたが、結局「皆人」の理解を得ることなく、「いよいよ嘲る」こととなってしまったこと。以上の構成は明らかである。

その構成を受けて、検証した結果、本段の論理に矛盾点があるとか、何が主張なのか不明だとかいうのは、大体次の四点によることが明らかとなった。

- 一、ふたつの「あざける」(第二段落と第三段落)という言葉の含むところ
- 二、「その理」(第二段落)「この理」「実の理」(以上第三段落)の三つの「理」の含むところ
- 三、「されば」(第三段落)の指し示すところ
- 四、キーセンテンス(作者がもっとも主張したいこと)(第二段落か第三段落)は何か

一について再検証してみる。最初の「あざける」は第二段落にあり、「かたへなる者」の発言の内容に対して用いられたのは明らかである。もちろん発言全体を受けて、嘲ったのであるが、とくに中心となる表現は何かというと、そのヒントは直後の「その理は牛の主に限るべからず」

にある。そこで、「はからざるに牛は死し、はからざるに主は存ぜり。一日の命、万金よりも重し。」に注目する。そこで、「牛は死し」「主は存ぜり」とあるのに続く「一日の命、万金よりも重し。」が第二段落のキーセンテンスであろうと考えることができる。これと関連して、第二段落の冒頭が「牛の主、誠に損ありといへども、又大きな利あり。」で、末尾が「万金を失はん人、損ありといふべからず。」であることから、かたへなる者は、「牛の主」は「損をしていない」ということを主張したいこともわかる。「皆人」は、逆説的な「かたへなる者」の発言に、反論して嘲ったことになる。

以上から二の「その理」の「理」も「一日の命、万金よりも重し。」であることも判明する。結局第二段落までは論理の展開も非常に明快なのである。したがって本段の不明瞭さは、偏に第三段落にあるといえる。第三段落は、「皆人」の「嘲り」に対する、「かたへなる者」の反論と、それを聞いて「皆人」が「いよいよ嘲る」結果となったことで終了する。この「嘲る」は、「いよいよ」とあることから、第二段落の「嘲り」と同一内容であり、そのレベルがあがったということもわかる。つまり第三段落は「かたへなる者」の懸命な反論（というのは先ほどよりも長く、あれこれと述べたてていることからの判断であるが）が空回りに終わったということになる。要するに、「皆人」は「かたへなる者」の説得にまったく応じようとしていないのである。最初の「嘲り」では「その理は牛の主に限るべからず」と反論したが、次の「嘲ける」で何も論じていないのは、「皆人」はそれ以上言うべき必要がないからである。

なお二の「この理」は、その直後に「人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。」とあり、その部分が前の「人、死を憎まば、生を愛すべし。」と対応するので、「存命の喜び、日々に樂しまざらんや。」を指すことがわかる。また「実の理」の「理」は「道理・真理」という、本来の意味であり、三つの「理」がすべて別の内容であることが本段をわかりにくくしている一因でもある。

三の「されば」であるが、これは「皆人」の「その理は牛の主に限るべからず」を受けて、反論にむかうことばである。ある意味で、「待ってました」という含みがあるかもしれない。そういう一般人の反論は当然予期していたのであろう。そこですぐに「人、死を憎まば、生を愛すべし。」が回答となって表現されたというわけである。結論から言うと、四の回答にもなるが、これが第三段落のキーセンテンスであり、かつ「かたへなる者」の主張の根源をなすものである。また、ひいては本段のキーセンテンスでもあり、作者兼好の言い分ということにもなろう。第二段落の「一日の命、万金よりも重し。」は第二段落に位置することと、「牛の値、鵝毛よろも軽し。」と対になっていることなどから、全体のキーセンテンスにはなりえない。

続く「存命の喜び、日々に樂しまざらんや。」はそのキーセンテンスを受けて、そうであれば、「日々に樂しまざらんや。」でないわけがない、という論である。次の「愚かなる人」はまさに「皆人」を暗に意味している。

なお、「人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るるなり。」は「皆人」から「人皆」への一般論としての強調表現であり、「死の近き事を忘るるなり。」は第二段落の「死の近き事を知らざる事」に対応している。

次の「生死の相にあづからずといはば、」に注目したい。この「いはば」は假定条件として、第三段落のはじめにある「されば」と照応しているのである。つまり「皆人」は「牛の主に限るべからず」と反論したことを「されば」（確定条件）で表し、そうでなくて、「生死の相にあづからず」と言ってくれたなら（「いはば」で假定条件）、「実の理を得たり」と認めてもいい、と主張しているわけである。

しかし、結局、「かたへなる者」の主張は、「皆人」には受け入れられなかった、というところで、本段を作者は閉じている。

ここで、全集頭注を再掲する。

「明日売る牛を死なせた持主が損をしたとする日常の論理は、死に当面している生命を忘れているところに成り立つ。忘れていたものには、生を楽しむことも切実でない。相対世界を超越することなど通じようもない。嘲る人々の論理には、少しの発展もないが、「かたへの人」の論理にも、世俗とかみあわない空転がある。兼好は「かたへの人」の立場から、度しがたい世俗の論理を批判しているが、彼らの嘲笑する声にも、耳をかしているに相違ない。」

結局、概ね、以上のようなことであろうが、問題は最後の「彼らの嘲笑する声にも、耳をかしているに相違ない。」という部分である。「耳をかしている」とは中途半端な表現であり、これだと「かたへなる者」の主張も、「皆人」の主張も認めていることになる。「耳をかしている」のではなく、世の中の人々は、こんなものだ、と淡々と記しているにすぎないだけであろう。批判とか評価とかそんなレベルではないということを補って本稿の結びとする。

参考文献

『徒然草』（日本古典文学全集 小学館 永積安明）

『徒然草 講座 第二巻』（有精堂 山下宏）

『徒然草 全注釈 上巻』（角川書店 安良岡康作）

『徒然草諸注集成』（右文書院 田辺爵）

『徒然草 研究と講説』（桜楓社 佐々木清）